

## 通貨の消滅と中央銀行機能 - エクアドルとエルサルバドルにおける公式のドル化政策の事例から（報告要旨）

立教大学大学院経済学研究科博士後期課程  
星野智樹

ドル・ユーロ・円といった先進国の通貨が国境を越えて世界中で使われるようになる一方、途上国では自国通貨が駆逐される形で外貨が流通しているケースが少なくない。こうした現象を読み解く分野として、ベンジャミン・コーヘンとエリック・ヘライナーら国際政治経済学者の間で「通貨の地理学」と呼ばれる議論が出現している。彼らの議論によれば、1970年代以降に進んだ金融グローバル化によって、すべての国家が必ず通貨を持つという「一国家一通貨」、通貨の流通は通貨発行国の国境内にとどまるという「領土的通貨」、そしてこれら2つの概念からなる「通貨のウェストファリアモデル」は揺らいでおり、国民通貨同士でヒエラルキー構造が生じている。こうしたことの極端な例は、国家自らが自国通貨を消滅させてドルを法貨として用いる「公式のドル化政策」である。最近では、2000年にエクアドル、2001年にエルサルバドルが公式のドル化政策を実施した。

本報告の課題は、エクアドルとエルサルバドルを事例にして、自国通貨を消滅させた国の中央銀行がどのような役割・機能を持っているのかを検討することである。この課題の検討を通じて、政策主体がどのように変化するのかを見ることにしたい。

本報告では、エクアドル中央銀行とエルサルバドル中央銀行の特徴として3つのことを見る。第1に、両国の中央銀行は、「銀行の銀行」としての機能を担っている。両国の中央銀行は、銀行間決済や市中銀行の準備預金の積み立てのために市中銀行向け預金を受け入れると同時に、中央銀行発行債や国債を通じた公開市場操作や預金準備率操作と市中銀行向け貸出による金融政策、外貨準備を用いた「最後の貸し手」としての行動を行っている。第2に、政府預金を受け入れ、エルサルバドルのケースでは政府の経済政策や起債への助言をしていることから、両国の中央銀行は「政府の銀行」としての機能も担っている。第3に、公式のドル化政策の定義そのものから推察されるように、エクアドルとエルサルバドルの中央銀行は「発券機能」を失うと同時に、両国では自国通貨が消滅しているのだから、国内の通貨（ドル）流通量は対外取引の結果に左右されるようになり、金融政策の実施や「最後の貸し手」としての行動は中央銀行の持っている外貨準備の範囲内に限定されるようになる。

なお、自国通貨を消滅させることは、途上国に限ったことではなく、欧州共通通貨ユーロに代表されるように先進国でも見られることである。本報告では、エクアドルとエルサルバドルの公式のドル化政策の事例から、欧州通貨統合への示唆を得ることも目標にした。